

平成31年
3月10日(日)
第4号

〈発行者〉
千葉県
中学歴史教科書
読み比べ会

〈連絡先電話〉
070-6941-1941

琉球処分

清も認めた！沖縄は日本だ！



(上)沖縄の「主権」確立を主張する公開討論会(2013年)
(中)集会で「琉球独立」の旗を掲げる人々(2007年)
(下)「收回琉球」、「解放沖縄」の横断幕を掲げてデモする中国の人々(2010年)

【はじめに】

ここ数年、沖縄に関連するニュースを耳にする機会が多くなった。特に多いのが、「米軍基地移設反対」・「沖縄の主権確立」・「琉球独立」等と訴える人々のニュースである。また、平成二六年、平成三〇年の沖縄知事選挙で、米軍基地移設反対派の知事が連続して当選するなど、日本政府との間の政策のずれが、顕著になって来ている。

なぜ一部の沖縄の人々は、「沖縄の主権確立」・「琉球独立」という国家の根幹に関わるような主張をしているのだろうか？また、なぜその動きに、中国や韓国の人々も同調しているのだろうか？

このことを理解するには、沖縄が日本に帰属した際の歴史を振り返ってみる必要がある。今、沖縄で起きている諸問題は、過去の歴史にその原点がある。そして、当然のことながら、その諸問題の正しい理解には、正しい歴史の記述が必要であるの言うまでもない。

では、沖縄をめぐる日本と中国の関係を、各社の中学歴史教科書では、どのように記述されているのだろうか？
以下、東京書籍、教育出版、帝国書院、自由社の順に引用する。

【東京書籍】

「沖縄県の設置と琉球の人々」本文一六九頁
 ≪琉球王国は、薩摩藩に事実上支配されながら、清にも朝貢するなど、日清の両方に属する関係を結んでいました。日本政府は一八七二年に琉球王国を琉球藩としました。さらに日本政府は一八七九年、軍隊の力を背景に、琉球の人々の反対をおさえ、琉球藩を廃止して沖縄県を設置しました(琉球処分)。朝貢する国を失った清は日本に強く抗議しました。琉球をめぐる日清間の対立は、日清戦争で台湾が清から日本へゆずりわたされることで自然消滅するまで続きました。≫

【教育出版】

「領土の画定と沖縄県」本文一六五頁
 ≪琉球王国は江戸時代以来、薩摩藩の支配下でありましたが同時に清にも朝貢していました。政府は、琉球を日本の領土にしようとして、まず琉球藩をおき、台湾に漂着した琉球の人々が殺害された事件を理由に、一八七四年、台湾に出兵しました。一八七九年には軍隊を送って琉球藩を廃止し、沖縄県を設けました(琉球処分)。≫

「琉球処分」琉球王国の終わり」欄外一六五頁
 ≪一八七五年、政府は琉球の代表を上京させ、清との関係を絶つよう求めましたが、琉球側は強く抵抗しました。説得に応じない琉球側に対し、一八七九年、政府は武力で首里城を占領し、廃藩置県を断行しました。≫

【帝国書院】

「琉球から沖縄県へ」本文一六八頁
 ≪江戸時代の琉球は、幕府や薩摩藩の支配を受ける一方、清から国王が任命され、欧米諸国からも独立した王国と認められていました。新政府は、琉球を日本領に組み入れようと、一八七二(明治五)年に琉球藩を設置しました。これに対して、琉球は清との関係と王国を維持しようとし、清も琉球藩の設置を認めませんでした。しかし一八七四年、清領の台湾で琉球の漂流民が殺される事件が起こると、新政府は出兵し

て清から賠償金を獲得しました。さらに一八七九年、軍隊や警察の力を背景に新政府は琉球藩を廃止して沖縄県を設置しました。また、日本と清は、琉球の所属問題をや朝鮮をめぐる問題などで対立するようになりました。》

【自由社】

「琉球処分」本文一七三頁

《「台湾出兵と琉球処分」日本は、清との国交樹立のため、一八七一年（明治四）年、国際法の原理に基づく、両国対等の関係を定めた日清修好条規を結んだ。琉球は、江戸時代から清と日本の両方に服属していた。同じ一八七一年の七月、日本政府は琉球を鹿児島県の管轄に置いた。同年一〇月、琉球御用船が難破して台湾に漂着し、琉球島民（宮古島の住民）五四人が現地人に殺害された。日本はその責任を清に問うたが、清は台湾の住民を「化外の民」（国家統治のおよばない者）であるとして、責任を回避した。そこで日本政府は、台湾の住民を罰するのは日本の義務であるとして、一八七四（明治七）年、台湾に兵を送った（台湾出兵）。…清との協議の結果、問題は解決したが、清はこれにより、琉球島民を日本国民と認めた。日本はそこで一八七九（明治一二）年、琉球を正式に日本の領土とし、沖縄県を設置した。》

「琉球処分とは何か」コラム一七四頁

《「一種の奴隷解放」琉球は、薩摩と清国に両属し、人々には薩摩への毎年の貢納の他、清国から迎える使節の接待の費用も大きな負担でした。薩摩と清国への両属する状態を終わらせたのが琉球処分でした。これを高く評価して、沖縄学の父といわれる伊波普猷（いはふゆう）は「琉球処分は一種の奴隷解放だと表現しました。しかし、琉球王国の内部は琉球処分に賛成し、沖縄県として近代化していきこうとする日本派と、これに反対して清国の救援で琉球王国を復活させようとする清国派とに分裂し、沖縄県設置後も両者の対立はつづき、激しくあらそいました。両派の対立は日清戦争のときピークでしたが、戦争で日本が勝利したことよって清国派がなくなり、長くつづいた対立は終わりました。》

以上、引用おわり。

東京書籍は、台湾出兵と、清とのやり取りを記述せず、日本が軍勢力を背景に、一方的に琉球を日本領にしたとの印象を与える記述となっている。また、教育出版、帝国書院もこの視点は同じであり、日本と清とのやり取りの経緯を無視している。あたかも、清の言い分を代弁しているようにも見える。

自由社は、台湾出兵の経緯と、日本が正当な手続きを経て琉球の帰属を清に認めさせたことを記述している。さらに、伊波普猷の「琉球処分は一種の奴隷解放だ」と表現しことも取り上げるなど、決して日本側が一方的に帰属させたのではなかったことも記述している。それだけではない。当時、琉球の人々の中で、日本派と清国派に分かれて対立していた経緯と、その後の日清戦争で清の敗北を受けて、清国派がなくなっていた事実まで記述している。

戦後、日本の敗戦により、沖縄は日本領土から分断され、アメリカの統治となった。これが、沖縄の一部の人々のナショナリズムを刺激し、琉球独立運動の動機となったと言われている。

奇しくも、一九七二（昭和四七）年は、沖縄の本土復帰と日中国交正常化が実現した年でもある。その沖縄で再びかつての日本派と清国派が対立していた歴史が繰り返されているように見えるのは、決して偶然のことではない。今、伊波普猷が生きていたなら、彼の目に沖縄はどう映ったであろうか？

以上



伊波普猷(1876~1947)
(自由社版中学歴史教科書より)

「中学歴史教科書読み比べについて」

千葉県内の中学歴史教科書の採択状況は、左記のとおりです。
教育出版（船橋、習志野、八千代、香取、神崎、多古、東庄）
帝国書院（市川、浦安）
東京書籍（右を除く市町村）

私共は、この大手三社に加え、自由社の併せて四社の歴史教科書を約二年間に亘って読み比べました。その結果、正しい歴史の記述がなされ、子供が日本の国に誇りの持てる歴史教科書は、自由社の教科書であるとの結論に至りました。そして、この結果を踏まえ、県内の中学生の子供を持つ父兄、並びに教育関係者への周知を図るため、この「中学歴史教科書読み比べ」を不定期に発行し、現在千葉県内で採択されている大手三社の歴史教科書の問題点を明らかにしてゆく所存です。（会員一同）

※バックナンバーご希望の方は、一頁の連絡先電話までどうぞ。